
男の娘？いいえ、アホの子です

輝く三輪車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男の娘？いいえ、アホの子です

【Nコード】

N6196Z

【作者名】

輝く三輪車

【あらすじ】

西暦2012年。世界はマヤの予言通り終焉を迎えた。

しかし全ての生が滅びたわけではなかった。

世界の崩壊が始まった直後、運良く“螺旋”の外へ弾き出された者たち 即ち 終焉を逃れた者たちが、別の“螺旋”の神に拾われ新たな“螺旋”へと世界を渡る。

じゃじゃ馬“男の娘”の時音 燦と燦の世話係の“お母さん”こと筑後 燐はそれぞれ終焉を逃れた者の1人。そんな彼らが新たな人生を謳歌する。

これは“剣”と“魔法”の異世界物語。

注)

- ・主人公と準主人公の漢字が似ているため読みづらいかもしれません。
- ・オリジナルなのは初めてなので不慣れです。ご了承ください。
- ・ですが、悪い所を指摘して頂けると喜びます。
- ・現在受験生なので更新は不定期です。

見た目からイメージする話し方は必ずしも一致しない（前書き）

受験のストレスのせいかなインスピレーションがわっきわきなため書いてみました。

後先考えていませんが大まかな道筋はいろいろと思いついているため打ち切ることはないです。

見た目からイメージする話し方は必ずしも一致しない

西暦2012年。世界は終わりを迎えた

小鳥の囀^{さえず}りと、眩しい朝の陽光を浴び、顔をしかめてのそりと起き上がる男が1人。

その男の名は時音^{ときね} 燦^{さん}。 齢は成人一歩手前の18。だが丸く大きな黒い瞳に少々丸みを帯びた鼻頭、小顔で赤みがかった張りのある頬により実年齢よりも幾分か いや 大分若く見せ少年のように思わせる。

さらに、そこに“男性にしては長く艶やかな黒髪”を装備（地毛なのだが）することで少年というよりも少女に。世にいう“男の娘”という存在である。

その彼（違和感が拭えないが便宜上『彼』と呼ばせてもらう）は寝起きのためか虚空をぼーっと眺めている。

間の抜けたその表情は笑いを誘うが、面白おかしいそれではなく親が子に向けるものと同じ温かい微笑み。さらに女性であれば母性を、男性であれば父性をくすぐられるであろうあどけない表情でもある。美男美女は何をしても絵になると言われるが彼もそれに当てはまるだろう。なんとも羨ましいことだ。

彼がふぁっと大きなあくびと共に伸びを1つ。

やっと活動しだしたようだ。

「…………あれ？…………どこだここ…………？」

彼は周りを見渡しこてんと首を傾^{かし}げた。

純粹！！首を傾げるといふ単純な行為が、極悪非道と謳^{うた}われる（？）罪人を瞬く間にロリコンあるいはシヨタコンに目覚めさせる！！（確定）。それほど純粹なのだ！！一種の生物兵器と言っても過言ではない。

そんな兵器認定を受けた彼は寝ぼけ眼をこすり、目を開いた。

まず彼の視界に入っただのは本を詰められるだけ詰め込んだ感の漂う本棚。そして右にずらすと白い扉。さらにずらすと年代を感じさせる木製の丸机に椅子。上を見上げると天井を覆い尽くすように貼られた色々な記号の書かれた紙が何枚も。後ろにある窓の向こうには生い茂る木々が。鹿や鳥などの動物もわっさわさ。

「…………あれ？…………どこだここ…………？」

再び首を傾げ、困惑気味の燦^{さん}。

どうやら彼にとって今挙げたモノは全て馴染みがないようだ。

「…………俺ってどっかに旅行中だったか？…………いや昨日はちゃんと家で寝たよな…………。」

…………じゃあ誘拐か？…………そうか誘拐か。この年で誘拐されるとかマジないわ」

自問自答により『誘拐された』という考えに至ったようだが、一般的な体格の成人男性が優に通れるほどの窓を難なく開閉できる（燦

はそのことを知らないかもしれないが）部屋に攫ってきた者を閉じ込めるだろうか？

もしそうならばその誘拐犯は余程間抜けだったのだろう。

「ん？」

不意に部屋の扉がノックされた。

「ハッ、わざわざ俺に殺られに来るとはバカなヤツだな。俺の108ある必殺技の1つをお見舞いしてやるッ」

燦^{さん}は殺る気満々のようだ。

彼は静かにベッドからフローリングの床へと降り立つ。そして足音を消して　　とは言っても床がそれなりに古いためキィキィと軋む音が小さく響くが　　素早く扉と本棚の間、即ち誘拐犯（仮）が部屋に入るまで彼のことを気づかない絶妙な位置に姿を隠す。

ガチャリとドアノブを回す音と共に扉が開いた。

（先手必勝ッ！！）

「ブルウツムンツデッスツットロイヤーツ！！」

全身の“バネ”をフル活用し、右手一本に力を収束した渾身の一撃。『ブルウツ』と言い出した時点で撃ち出しているので誘拐犯（仮）の耳にその声が届いた時には既に拳は鳩尾5cm前。完全な不意打ちだ。

『ブルームーンデストロイヤー』。名の通り『水月（鳩尾）を破壊するほどの一撃』。『速い！鋭い！重い！』の3拍子が揃って初めて免許皆伝、というのがこの技を燦に教授した近所のお兄さんの弁。幾度となく敵　　主に練習相手であった近所のお兄さん　　を屠^{ほぶ}つ

てきたその一撃は誘拐犯（仮）の鳩尾へ吸い込まれるように見事にきまった

「こら、危ないだろ？」

かのように思われた。

なんちゃって武闘家の近所のお兄さん（実力有り）ですら避けられないBMDを誘拐犯（仮）はその拳が鳩尾に達した瞬間、人間では有り得ない速度で反応、そして体を反転させ避けた。

それにより燦の顔が驚愕に染まり、それと共に勢い余って部屋の外に転がり出そうになる。だが心優しい（？）誘拐犯（仮）が彼を優しく受け止めた。

「燦。ちゃんと相手が誰か見なさい」

燦のことを知っているようで彼を咎めるような口調で告げる。

「あ？」

その聞き覚えのある声に燦は襲うのをやめ、支えられている状態から離れて誘拐犯（仮）の方を見る。

するとそこには燦とは対照的な青年が立っていた。

青年は切れ長のライトブラウンの双眸、すっきりと通った鼻筋、彫りが深く野性味溢れる顔立ちで、長めのウルフ。身長も燦が168cmと小柄なのに対し2mに届こうかというほどの長身。

年は燦と同じく18歳なのだが、燦とは違い少し前まで少年だったということを感じさせない。

「お、燐^{りん}じゃねエか？どした？」

青年の名は筑後 燐^{りん}。燐の幼なじみであり、暴走する燐の唯一のストッパー。そのため周囲からは大変重宝されており、男だと言うのに“お母さん”と呼ばれている。その所以は見た目に似合わない丁寧な物腰にある、というのがもっぱらの噂だ。

「話があるからついてきなさい」

「あいあいさー」

燐の言葉に敬礼を返し、部屋を出る。

部屋を出たことで燐の得た情報は、彼が眠っていた部屋が廊下の端に位置するということと他にも2部屋ほどあるということ。

突然だが『暴走』と書いて『燐^{さん}』と読むほど燐は暴走と縁が深い。

そんな彼が閉じられたら扉を見て我慢できるだろうか、いやできない（反語）。

そんなわけで燐は躊躇うことなく一番近くの扉のドアノブに手をかける

「拉致」

前に燐に流れるような動作で腹を搔つ攫われ、脇に抱えられてしまった。

流石長年燐の世話をしてきたためその動きは、月を映す水面のように穏やかで、且つ流水の如く滑らかで惚れ惚れするほどだ。

「オイ！！燐離せッ！！あの部屋に何かがあるって俺の五感が告げてんだよッ！！」

犬歯を剥き出しにしてフーツフーツと猫のように燐を威嚇する。だが童顔のため効果はなさそうだ。寧ろ微笑ましい。

「そういう時は普通『五感』ではなく『第六感』と言います。覚えておきましょう」

「インテリア振ンな!!」

「『インテリ』ね」

「ぐっ!! あ、揚げ足ばつかとんなッ!!」

「はい、よくできました」

よしよしと脇に抱えたまま燦の頭を撫でる燐。そんなやりとりをしている内にリビングがらしき場所へ。

「やっと来たか。待つておったぞ」

リビングに着いて早々に2人に声がかかる。その声の主は目を瞑った、真っ白い髭を蓄えた老人。

「ん? 誰だじーちゃん?」

未だに脇に抱えられままの燦が老人に問い掛けると、老人はその言葉を待つてましたと言わんばかりに目をクワツと見開いた。

「待つておったぞその言葉!!」

実際待つていたようである。

「ワシはなッ!! 時空と豊穣の神クロノスじゃッ!!」

ガタツと椅子から立ち上がり大仰な身振りで誇らしげに老人
改
め 老神^{マコト}は告げた。

老神が誇らしげな一方その頃

「燦。アホが感染るから見ちゃいけません」

「コラ、目エ隠すな！ーあのじーちゃんぜってー神だって！ー威厳
タツプリじゃねエか！？あの髭見ろッ！ー長エし白エしッ！ー」

「はい、確かに髭タツプリですね」

「そうじゃねエ！？」

2人で漫才をしていた。

実に可哀想な老神である。

「それはそうと燦にも先程の話を」

「……わかつたがのう、オヌシもその子ほど反応してくれんかの？」
「過ぎたことを気にしては神も人も前には進めませんよ？」

燐は老神の申し出を斬って捨てた。

「……手厳しいのう。ま、いいわい……」。

それで話したいことじゃがな、オヌシたちをワシの世界へ送る
がよいか？」

「……意味わからん」

「そのまんまの意味じゃよ。」

オヌシたちの世界は滅びたのにオヌシたちは生きとる。じゃから代
わりの世界で残りの人生を謳歌してもらいたいというワシな
りの気配りじゃ」

「……え？何？」

今の説明で燦の脳内メモリーは容量オーバーのようだ。些かなす
ぎる気もするがそれを補うように燐の脳内メモリーが膨大なので無
問題。

そんな燦の様子を見て燐が説明しだす。

「俺たちの世界滅亡、これの意味は分かりますか？」

「あんまバカにすんなよ？地球が木っ端微塵になったとか宇宙人の侵略とかそんなとこだろ？」

「……まあ、そんな感じです」

「んで？」

「世界は死んだけど俺たちは死んでないから残りの人生を楽しめ、と言うことらしいですよ？」

「OK。理解した」

燦の場合最初と最後さえ分かれば間をどれだけ端折っても問題ないようである。

「んじゃさ、燐。じーちゃんの世界にはどーやって行くんだった？」

「……どうやって行くんですか？」

老神の世界への行き方は聞いていないようで燐は老神に尋ねた。

「ワシが飛ばす」

「どういう意味ですか？」

「転移魔法で飛ばす」

その老神の言葉に燦が反応する。

「“魔法”……！！??」

「おー、そうじゃ言い忘れておったな。

ワシの世界には“魔法”があつての、ふあんたじーでくれいじーなちよべりばわーるとなんじゃ」

「……じーちゃん。テキストに知ってる単語並べるのはやめといた

方がいいぞ？しかも大分古いのが混じってたし」

「む、そうかの？ま、気にするでない」

「あの、もしかして俺たちって魔法使えるんですか？」

「うむ、使えるぞい」

燐の問に老神が深々と頷いた。

「マジかッ！？手から炎とか出せんの！？」

「もちろんじゃ。」

そうじゃな……魔法の属性を選んでみるかの？ワシからのさーびすじゃ。

基本属性の魔法と特殊属性の魔法。どっちがよいかの？」

「それじゃあ、まず基本属性は何があるんですか？」

「基本属性は【火】【水】【土】【雷】【風】【光】【闇】の7種類じゃな。」

『属性の心髄を理解できればある1つの属性にすべては収束する』
ということ覚えておくと良いぞ。オヌシなら心髄に辿り着ける気がするしの」

「1つの属性に収束、ですか……」

「シンズイとかシューソクとかそんな話はいーから特殊属性は？」

「特殊属性はの、【時】【空】【音】【幻】など。ワシも把握仕切れとらんのう。それなりにあつたし覚えきれなんだ」

ハッハッと朗らかに笑う。

「さて、どれがいいかの？」

「俺はもちろん【火】ッ！！」

「わかったぞい。オヌシは？」

「……それでは【土】で」

「ふむ、2人とも基本属性とは少々驚きじゃな。こういう場合は特

殊属性を欲しがるものじゃと思っておったがなかなか違つようじやな。

折角じゃし、特殊属性も付与してやろう。

『“時”音 燦』と言う名前じゃしオヌシには【時】を、『“筑”後 燐』じゃからオヌシには【音】をな」

そう告げると老神が手を淡く光らせて2人の頭にその手を置いたが、時間にして1秒にも満たないうちに手を放した。

「ほれ、これでおしまいじゃ。魔法の使い方は実践で身につけると良からう」

「あ、おう！！気になったんだけどさ、なんで俺たちの名前知ってるんだ？」

「そりゃ、ワシ神じゃしな。

それではそろそろ飛ばすぞ？」

「え？ちよっ！！まだいろいろ聞いてませんよ！？」

「自分の目で見て知ること大事じゃぞ。

そついうわけじゃし、また会う日を楽しみにしておるぞ」

老神が言い終えると2人に口を開かせる暇を与えず、彼らの足元に半径1mほどの魔法陣を展開、そして発光。その眩しさに2人は咄嗟に目を閉じ、光が止んだあと再び目を開くとそこには老神の姿はなく、代わりに生い茂る木々が視界いっぱいに広がっていただけであつた

見た目からイメージする話し方は必ずしも一致しない（後書き）

燦と燐にフリガナあるのとないのではどちらの方が読みやすいですか？

一応これからも付けるつもりなので意見を聞いておきたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6196z/>

男の娘？いいえ、アホの子です

2011年12月20日20時56分発行